

=====

GCOE NewsLetter
[No.14 2008/11/21]

ジャック・ダラン博士の講演会について（再掲）

次回のオープンレクチャーについて

ジャック・ダラン博士の講演・講義聴講記

「テキスト布置解釈学各論」の要約

gCOE研究教育員ブリーフィング要約

=====

■ ジャック・ダラン博士の講演会について（再掲）

招聘教授のジャック・ダラン博士の講演会が下記の通り開催されます。

2008年11月27日(木) 午後2時30分～ 名古屋大学文学研究科大会議室

「アッシジの聖フランチェスコと聖女クララの関係に見る男／女関係」

(使用言語 英語)

■ 次回のオープンレクチャーについて

2008年12月10日（水）18:00～ 名古屋国際センタービル15F GCOEオフィス

講演者：長尾伸一（経済学研究科教授）

題目：「啓蒙時代の自然と人間」

■ ジャック・ダラン博士の講演・講義聴講記

小澤 実（gCOE研究教育員・西洋史学）

・グローバルCOE講演会「歴史史料としてのバイユーの綴れ織り」（11月5日18時～19時30分 名古屋国際センター内GCOEオフィス）

現在バイユー市立博物館に収められている「バイユー・タペストリー」は、11世紀西ヨーロッパの刺繍技術を知るための貴重な現物であるのみならず、ノルマンディ公ギヨーム、のちのウィリアム征服王による1066年のイングランド征服（ノルマン・コンクエスト）を理解するために不可欠のビジュアル史料でもある。一部欠損しているにもかかわらず、その長さは70メートルに達している。

このタペストリーをめぐるのは、これまでも数多くの碩学（たとえばF・ステントン、D・M・ウィルソン、L・ミュッセ）が精緻な注釈を執筆し、幾度にもわた

るシンポジウムが開催されてきた。ダラン氏は、そのような過去の成果を十分に吸収した上で、名古屋大学グローバルCOEプログラムに相応しい観点から、このビジュアル史料解読の作法を披露した。講演の内容は、1「作品、トピック、歴史」、2「タペストリーの意味」、3「タペストリーが教えること」の三部からなる。パワーポイントを用いながら、タペストリーの描写内容、素材や外形、その伝来過程といった基礎的情報を提示しながら、しだいにテキスト論的理解へと聴衆を誘いこんだ。

講演の白眉は、タペストリーを、ホメロスの英雄物語の影響を受けた作品ではないかと論じた箇所であった。もちろん初期中世西洋において、ホメロスのギリシア語写本が伝来していたわけではないが、ラテン語訳を通じて彼による英雄物語の記憶は連綿と受け継がれていた。ある研究者は、タペストリーに描かれるギヨームの船名Moraは、ギリシア語のmoira（運命）の変形ではないかと示唆している。運命に抗いながら栄光をつかむ英雄物語というモチーフは、本来ギリシアのものではあるが、それがローマ世界を経て、初期中世西洋でも変容したかたちで受容されていた、と示唆する。タペストリーの物語解釈においても、初期中世西洋とギリシア世界との関係においても、刺激にみちた講演であった。

・第1講義「グレゴリウス改革期におけるロベール・ダルブリッセルと修道女の生活」（11月12日4限 文系共同館2B）

アルブリッセルのロベール（c.1045-1116）は、グレゴリウス改革期のフランスを代表する隠修士である。教皇からの裁可を得て、1101年にフォントヴロー修道院を創設したロベールについては、従来の修道霊性研究で十分な注意が払われてこなかった。しかしながら、同時代の関連文書を博捜し、この隠者に関する基本的情報とその理念を同時代のコンテキストの中に位置づけたのが、『不可能な聖性。アルブリッセルのロベールの見出された生涯』（1985年）であった。その著者が、講演者ジャック・ダラン氏その人である。したがって、この日の講演は、彼の研究の出発点であり、そして最も得意とするテーマを下敷きとしている。

ロベール自身は必ずしも大部の著作を残しているわけではない。それゆえ、彼がグレゴリウス改革という西洋中世にとっての転換点（ただしフランスにとっては、グレゴリウス改革よりも紀元千年変動のほうが大きな問題である）というコンテキストの中で、どのような思想を育みそれを実践したのかを知るためには、彼について述べた他の人物の著作によらざるを得ない。ダラン氏は、ブルゲイユのボドリ、レンヌのマルボド、ヴァンドームのジョフロワ、フォントヴローのアンドルーといった同時代人たちの、ロベールに対する評価を丹念に追いながら、修道生活に女性をとりこみ、会則を練り上げたロベールの人物像を、パズルのピースを一枚一枚はめ込むような丁寧なやり方で再現した。

他方で今回の連続講義は、歴史家がナマのテキストからどのような情報を引き出すかという点に重心が置かれている。ダラン氏はパワーポイントに写本を映し出

しながら、写本に描かれている挿絵の図像学的解釈に加えて、写本を閉じるための穴、字を揃えるための罫線、欄外の書き込みといった、古書冊学の基礎的作業を丁寧に説明してくれた。教育者としての配慮も行き届いており、出席者に朗読や質問を課す双方向的なやりとりのなかで、テキスト論的な理解を身に着けさせようとしていた。

・第2講義「アベラールとエロイーズ往復書簡についての考察」（11月13日3限 文系共同館2B）

畠中尚志の訳で岩波文庫に納められているアベラールとエロイーズの往復書簡は、中世の恋愛風景を伝えるテキストとして、誰もが知る名品である。しかしながら、この書簡の真偽性をめぐっては、近年激しい論争が学者たちの中でたたかわされてきた。とりわけ1972年にジョン・ベントンが、往復書簡は13世紀後半の偽文書であるとの見解を提起して以来、文献学者らは往復書簡を記録する写本の成立過程にまでさかのぼることを余儀なくされた。その議論はすでに、かつてのように文学者や歴史家だけの領域にはおさまらない様相を呈している。

ダラン氏は、真贋問題からはいったん離れ、往復書簡が収められる『トロワ市立図書館802番』の成立について考察を深めた。この写本は往復書簡の成立にとって決定的な意味を持つ写本でありながら、正確な成立年代が確定していない。先日の講義に引き続き、写本になじみのない受講者の多くが十分に理解できるように、イニシャルや色文字といった西洋の写本に特徴的な要素とその機能について解説しながら、古書体学者がどのように写本を解読するのかを示してくれた。

以上のような写本研究の基礎的な知識を整理したうえで、ダラン氏は幾つかの問いを立て、他の研究者や自身による成果を巧みに引用しながら、その問いに対する仮説を提示した。とりわけ、1237年にル・パラクレ女子修道院長エルメンガルドが、3人の司祭と4人の修道女を連れてフォントヴロー修道院に赴くという、一見すると特別の意味を見出しがたい歴史事実が、写本の成立にとって持つ深い意味を論じる様は、『薔薇の名前』もかくやというほどの知的スリルを感じさせた。古書冊学、古文書学、歴史学の先端をゆく論者たちの説を巧みに利用しながら、『トロワ市立図書館802番』の成立を、1237年という特定の年代に落とし込んで行くダラン氏のその手腕と学問の醍醐味に、講義室の誰もが興奮したひと時であった。

・第3講義「アッシジの聖フランチェスコの自筆にもとづく母性統治についての考察」（11月17日4限 文学研究科大会議室）

アッシジのフランチェスコ（1181-1226）は、西洋中世宗教史上最大の人物といっても過言ではない。それにもかかわらず、驚くべきことに日本においては十分な研究蓄積がない。現段階では、キアラ・フルゴーニ（三森のぞみ訳）『アッシジ

のフランチェスコ『ひとりの人間の生涯』（白水社 2004年）が、ほとんど唯一の依拠すべき文献である。ダラン氏の今日の講義は、この想像を絶する彼我の落差を埋める稀有な機会であった。というのもダラン氏は、フランチェスコ研究の世界的権威だからである。

宗教的権威にありがちではあるが、フランチェスコ研究の困難さは、彼自身がほとんど何も書き残していないことにある。僅か2編の自筆原稿が伝わるのみであり、いずれも一件稚拙できわめて短い。本講義では、そうした自筆原稿の一方である修道士レオに宛てた書簡を題材とし、近年古書体学者バルトリ・ランジェリらによって提示された新しい読み方とその解釈について論じた。とりわけダラン氏は、書簡に見える「母のようにsicut mater」という表現に注目し、キャロライン・バイナムのようなジェンダー研究者の成果にも言及しながら、この文言の解釈を中心に解説し、さらには古文書学的分析から近代へとつながる「自己の内面化」という問題にまで話を広げた。毎年出講しているボナヴェントゥラ大学のセミナーで弟子たちとともに解明した最新の成果であり、アルブリッセルの口ベール研究以来、修道生活における女性や「女性的なるもの」に注意を払ってきたダラン氏ならではの観点からの解説であった。写本に向き合い、たった一つの文字、単語、文章、句読点をもゆるがせにしない解説作法は、テキスト研究の鏡ともいえるべき態度であった。

当日は大会議室のプロジェクターに不具合があった。そのため開始が30分ほど遅れたが、それを感じさせないほどの熱気ある講義であった。

・第4講義「ウンブリア伝説：アッシジの聖フランチェスコ新伝説」（11月18日4限文学研究科大会議室）

先日の講義でみたように、フランチェスコ自身による証言はほとんど伝来していない。したがって、彼の実像を再現するためには、チェラーノのトマスによる『伝記』のような、フランチェスコの間近に侍っていた人物による証言テキストに依拠することが必要となる。しかし、それぞれのテキストは、それぞれ情報ソースも異なり、また近代の校訂に至るまでに伝来する過程でテキスト上のズレも出てきているため、すべてのテキストをつき合わせただけでは「フランチェスコとは誰か」理解することは困難である。それは、四福音書にみえるイエス・キリスト像に齟齬があるのと同様である。

本日の主題は、歴史史料の「オリジナルとは何か」ということである。中世のテキストに関して、通常は唯一つのオリジナル写本が伝来しているわけではなく、そのオリジナル写本を書写した後世の異本が複数伝来している。写本校訂の基本原則であるラッハマン原則に従えば、複数ある異本を比較し、相対的に頻度の高いことばを拾うことによって、最も蓋然性の高いオリジナル写本を再現することが可能となる。しかしながら、異本とはそれ自体で一つの体系を持ったテキストであり、そこに見られるオリジナル写本との差異とは、必ずしも単なる書き損じではない。写

本系統図を作成し、オリジナル原本を再現することは必要であるが、異本にはそれぞれ独自の生命があり、それ自体として解釈すべき情報を提供する。アッシジの周囲に広がるウンブリア地方に散在するフランチェスコ言説の網をかき分けて、「オリジナル・フランチェスコ」を希求するのがフランチェスコ学者たちである。その一人であるダラン氏は、極めて高度な歴史家のアトリエを、パワーポイントの機能を駆使して垣間見させてくれた。

講義の最後にダラン氏に対し、招聘者である佐藤彰一教授から、4回の講義に対する感謝のことばが贈られた。その後、ダラン氏の滞在先である野依記念学術交流館にて、ダラン氏、グローバルCOE関係者、そして聴講学生たちとの交流会が開かれた。講義においても私的な交流においても、常に周囲への配慮を忘れぬ紳士であった。

■ 「テキスト布置解釈学各論」の要約

各論VII演習（集中）（10/3, 17, 24, 25）
古尾谷知浩「古代荘園史料の諸問題」

この講義は、弘仁9年3月27日「酒人内親王家施入状」（東南院文書）を素材とし、そこに載せられている美濃国厚見荘（後の茜部荘）・越前国（後の加賀国）横江荘に関わる資料を分析することを目的とした。

10月3日の講義では、厚見荘・茜部荘の沿革を整理し、その起源についての言説の変化を追った。東大寺領厚見荘（茜部荘）は、弘仁9年（818）に酒人内親王が東大寺に施入したことを起源とするが、遅くとも11世紀半ばには、同じ美濃国大井荘と並んで、茜部荘も8世紀の聖武天皇による勅施入であると主張されるようになり、12世紀前半には再び本来の酒人内親王施入説が登場する。この変化を、訴訟に関連する文書目録と照合しながら分析した。

10月17日の講義では、横江荘関連遺跡（横江荘遺跡・上荒屋遺跡）の変遷を整理し、木簡などの出土文字資料について検討。地子米付札木簡、出挙関係帳簿木簡、種籾付札などの木簡を取り上げ、周辺に居住する農民の労働力を動員して行われた農業経営の実態を分析した。

10月24・25日には、横江荘遺跡（松任市）・上荒屋遺跡（金沢市）の現地を踏査。宅地や工業団地の開発の中でかろうじて保存・整備された遺跡の現状を確認し、また、関連施設で出土遺物などを調査した。

■ gCOE研究教育員ブリーフィング要約

第9回ブリーフィング(10/23)

小林智「司法の近代化と自律的法解釈の条件整備」

近代法秩序は、自律的に法解釈を遂行する主体の系統的な産出を前提とする。それにより、権力作動の安定性が確保されるのである。裁判官のあり方は、とくにここで要請される法解釈実践の範型をなす。

日本の近代的司法制度確立期についてこれを見れば、当初、大審院設置以降、制度的には司法を担う機構が整うが、人的には官立学校による法曹養成だけでは量的に不十分であった。この過渡期的段階では、司法省・大審院による裁判干渉が行われた。

その後、公教育制度と資格試験制度が接続されると、大規模な私立法律学校が出現し、これが自律的法解釈主体を産出する装置として機能することになる。

裁判所構成法による裁判官の職権の独立によって、自律的法解釈主体による司法の条件が整った。同時期に起きるいわゆる老朽司法官淘汰問題は、新世代と旧世代との交代を意味するものであった。そこで求められたのは、自身の信念に基づく責任ある法解釈を行う資質である。

次回のメール版NewsLetterの発行は2008年12月中旬を予定しています。

・

..... ・

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.14

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

・

..... ・